

ピース、亡き息子の魂とともに……

群馬県／山田眞一・穂子夫妻

山

あいに佇む、木造の小さな駅舎に、新緑の香りの優しい風が通り抜けます。群馬県桐生市と栃

木県日光市を結ぶ「わたらせ渓谷鐵道」。上神梅駅の入口にある、古い木製ベンチに腰掛けながら、山田さん夫妻は34年前の思い出を振り返ります。

「ここを走るディーゼル機関車は『DE10』だよって教えたら、大助は『でーいーとおー』と得意気な唇をとがらせて、何度も言ってたね」

「兄弟で機関車に乗ってもう大喜び。車で迎えに来てくれるお父さんをこの駅で待ってたの。そう、この長椅子にちょこんと腰掛けて……」

4月22日、この日は夫妻にとって特別な日でした。22年前、18歳で亡くなった長男・大助さんの命日だったのです。眞一さんは語ります。

「あの日、大助は私たちが営むバイク店を朝から手伝ってくれていました。昼過ぎ、ディーラーへ部品を取りに行くね、と言っていたもののよう

にバイクで出かけたのですが……」
知らせを受けて駆けつけた病院に眞一さんの声が響き渡りました。



思い出の上神梅駅のベンチ。この日は廃校になった近所の小学校で、夫妻が中心となって「生命のメッセージ展」を開催していた。

「大助、起きろ！起きて一緒に帰ろう！」

しかし、願いは届きませんでした。「加害者の親族は『お宅の息子がジグザグ運転で勝手にぶつかってきたんだ！』と私たちを責めました。でも、後の裁判でそれは全く根拠のない嘘であることが明らかになりました。大助は見通しの悪い高架道路を直進中、突然脇道からバックで飛び出してきた車に衝突されたのです」
両親の店を継ぐのが夢だった大助

さんは産業技術専門校に入学したばかり。難関の大型二輪試験にも合格し、二輪車安全運転大会への出場を目指して練習に励む毎日でした。そんな我が子の真摯な姿が頭から離れなかった穂子さんは、大助さんのバイクで自分が同大会へ出場することを決意します。6年後には県大会の女性クラスで優勝し鈴鹿の全国大会へ。そして11年後、大助さんが最終的に目指していた二輪車安全運転指導員の資格も取得しました。

山

ユニケーションプロジェクト」に取り組んでいます。11月の「世界道路交通犠牲者の日」や交通安全週間には走行イベントを行い、ゆとり走行」の啓発活動を行います。

「道路を行き交う全ての人と心を結び、ピースサイン。混合交通の中、互いの気持ちを通い合わせることで悲しい事故は必ず防げると思うのです」

ゆつくりとホームを離れる一両編成のディーゼル車。その後ろ姿をじつと見送る二人には、聞こえていたのかもしれない。「でーいーとおー、でーいーとおー」小さな駅舎にこだまする、大助くんのあの声が……。



34年前、今と同じ木製ベンチで父の迎えを待つ、大助さん(当時小1)。